

A7009-48

No. 1.

(一) ^(會議及大東亞) 大東亞共同宣言の世界的意義

昭和十八年十一月五日及び六日、日本、中華民國、タイ國、滿洲國、フィリピン共和國、ビルマ國の各代表が東京に會し、自由印度假政府首班し之に陪席して大東亞會議を開催、大東亞戰爭之遂と大東亞建設の方針とに關し滿意なき協議を遂げたる結果、全會一致を以て左の共同宣言を採擇した。

大東亞共同宣言

抑、世界各國が各其の所ヲ得相倚り相扶ケテ萬劫共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ世界平和確立ノ根本要義ナリ。

(B 5)

10x25

No. 2

奇興センコトヲ期ス

一、大東亞各國ハ協同シテ大東亞ノ安定ヲ確保シ道義ニ基ク共存共榮ノ秩序ヲ建設ス

(B 5)

10x25

大東亞戰爭開始以來滿二十年を俟たずして東亞諸國の代
（東亞を米英の威嚇略取より解放し、東亞の爲に東亞を回復せんとす）
 表が一堂に會し、大東亞戰爭の共同遂行を誓ひ、大東亞建設
（共同）
 の精神と大東亞の新
 の秩序とを著く世界に宣言し、世界恒久平和の確立に寄與
（と執意と）
 すべき方針を表明せむことは世界史に一時期を劃すべし
 意義深き事件であり、正しく世紀の偉觀と言はるべし
 ならぬ。米英が強いてその傘下に糾合せり諸國と一堂に
 會して隔意なく議することとなく諸國の意志より離
（唯だ）
 て米英兩國が勝手に（大義名分の立たる）戦争目的を埋造し、自國中心の戦後經
 営案を議するのに對し、大東亞會議が東亞諸國の翕然たる
 共同執意の上に関かれ、各國代表一致して大東亞戰爭の
 遂

(115)

10x25

一、大東亞各國ハ相互ニ自主独立ヲ尊重シ互助敦睦ノ
 實ヲ譽ゲ大東亞ノ親和ヲ確立ス
 二、大東亞各國ハ相互ニ其ノ傳統ヲ尊重シ各民族ノ創
 造性ヲ伸暢シ大東亞ノ文化ヲ昂揚ス
 三、大東亞各國ハ互恵ノ下堅密ニ提携シ其ノ經濟發展
 ヲ圖リ大東亞ノ繁榮ヲ増進ス
 一、大東亞各國ハ萬邦トノ交誼ヲ篤ウシ人種的差別ヲ
 撤廢シ普ク文化ヲ交流シ進ンテ實業ヲ開放シ以テ
 世界ノ進運ニ貢獻ス

(115)

10x25

外一右
二行目百
ノ下に餘を
入ルること

と大東亞の建設に對する其の道義的責任を表明し、大東亞
戰爭の歴史の意義並に東亞及び世界の道義的新秩序を
堂々と宣言せむことは、既に今次大戰の性格が如何に異つたもの
ゆゑありのを明示して録りあると言へよう。大東亞會議
に陪席せる自由印度假政府首班、ホース氏が感慨深く述べ
た次の一節は、この會議の時質を表明して録置おしと言ひ
得るのである。曰く
「私が昨日及び本日此處にあつて此の大會議の議事を傾
聴致して居ります際、私の眼前にはパノラマの如く世界の
歴史が去來したのであります。私は過去百年間に開催せ

(115)

10x25

外一六行目の
婚和の増を
訂正
の字

No. 6

されまゝた數多の國際會議を回想したのであります。即
ち、ナポレオン帝國没落後一八一五年に開催せられた(唯)納會
議、クリミア戰爭後一八五六年に開催せられた巴里會議、
バルカンに於ける露土戰爭後一八七八年に開催せられた
柏林會議、前世界大戰の終決を告げた一九一九年のヴェル
サイユ媾和會議、太平洋及び極東に於ける英米の支配權
保せんが爲一九二一年開催せられた華府會議、及び獨逸
國民の手足を巧みに永久に拘束すべく一九二五年に開催
せられたロカルノ會議に想を馳せ、更に又嘗て私が印度の
自由の爲の叫びに耳を傾けし者を求め、久しくその室内

(115)

10x25

No. 7

を彷徨したことのあつた彼の国際聯盟の會議を想起し、
 でありませぬ。
 而して更に此の歴史的會議の議事を聽きつゝ、私は此の
 會議と嘗て世界史上に現れた類似の諸會議との間に如何
 に懸隔あるかに想を致したのであります。
 議長閣下。本會議は戰勝者間の戰利品分割の會議では
 ないのであります。それは弱小國家を犠牲に供せんとす
 る陰謀謀略の會議でもなく、又弱小の隣國を嚙殺せんと
 する會議でもないのであります。この公議こそは解放せ
 られし諸國民の會議であり、即ち正義、主權、國際關係に於て

(11.5)

10x25

No. 8

より患主義及び相互援助等の尊嚴なる原則に基いて世界
 の此の地域に新秩序を創建せんとする會議なのでありま
 す。
 實に大東亞會議は東亞諸民族が米英の侵略と搾取から
 自らを解放せんとし、政治上、經濟上、自主獨立を確立せんと
 する自覺的意志の凝集に外ならず、東亞を米英の爲り東亞
 の爲り東亞に還元せんとする共同の意志、即ち大東亞の意
 志を表現する會議に外ならずないのである。従來の歴史は
 欧米中心の歴史に過ぎなかつた。世界の秩序は欧米的秩
 序に過ぎなかつた。ここに於て東亞は欧米の爲り東亞で

(11.5)

10x25

あり、東亜の爲の東亜ではなかつた。今や東亜は東亜の爲の東亜たゞ人と欲し、又事實東亜の爲の東亜たる階足をなすに至つたのである。それが大東亜會議である。この意味で大東亜會議は欧米中心の近代世界史に終焉を告げ、新な現代世界史の發足を告げる世界史的事件であると言はなければならぬ。東亜の諸國は今や翁然として「大東亜の自覺に達した。併しこの大東亜の自覺は決して近代歐洲流の自覺ではなす。大東亜の自覺は東亜の歐洲流自覺ではなく東亜の東亜的自覺である。かゝる東亜的自覺の實質を表現せしむの爲め、大東亜共同宣言に外なす

(B 5) 10x25

不へのである。

抑、歐洲列強の東亜進出以前、東亜は東亜としての存在を維持してゐた。東亜が他の生存と繁榮の手段に化せられたのは、實に歐洲列強の進出、否、侵略以後の事態であつて、米國の東亜侵襲以來は東亜は殆ど全部欧米の植民地乃至植民地となつたのである。歐洲列強の進出以前の東亜は緊密なる統一性を有する東亜ではなかつた。それは東亜の地域が歐羅巴の如き狭き大陸ではなく、支那の廣袤は大體歐洲に匹敵す包、印度と支那は高峻なる山脈を以て遮られ、西亜また沙漠によつて東亜との交渉頻繁たり得ず、西南

(B 5) 10x25

太平洋の諸國は海程を以て遠ざられたが故である。併し、
 自然的地理的條件に拘らず、現在の歐洲民族よりは
 遙かに悠遠な文化的傳統を有する東亞の中には、
 此文化上、商業上の交流交易存し、政治的に使節の往來存
 して、稀薄とはいへ、尚ほ精神的の統一性が存したのである。
 大體モンスーン地域に存する東亞諸民族は、
 此に親近性を有し、團體觀念や文化意識にも根柢に通ず。
 此の存し之が文化の接觸によつて刺戟せられ、夫々独自の
 民族文化を形成し、下らば根柢に於ては共通性を藏する東
 亞文化圏が存立してゐたのである。そしてこの東亞文化

(B 5)

10x25

國は更に西亞の文化と交渉を有し、古く歐洲文化とさへ
 關係をもち、歐洲文化とさへ無關係のものはなかつた。
 此の意味で「東亞」は一つなりと言ひ得る東亞が、そ
 の統一性を失ひ、東亞が單なる地理的名稱に墮し、歐洲列強
 の東亞進出以來である。そして特に東亞諸民族の發展が
 歐洲の東亞支配に動搖を來すのを恐れた結果、歐洲列強、特
 に英國は巧みな二分統治政策、東亞西部の勢力均衡勢力
 和殺策を採り、東亞の民族的自覺の興隆、
 親和の統一性の成立を妨害し、たのである。比島領有後の
 英國の政策もこの線に沿うたものであり、欧米の愚民政策

(B 5)

10x25

對印度政策に見る如く、
 歐洲の東亞支配に動搖を來すのを恐れた結果、歐洲列強、特
 に英國は巧みな二分統治政策、東亞西部の勢力均衡勢力
 和殺策を採り、東亞の民族的自覺の興隆、
 親和の統一性の成立を妨害し、たのである。比島領有後の
 英國の政策もこの線に沿うたものであり、欧米の愚民政策

の如きは二、から成立するものに外ならず。要するに
 一曰獲得した(政治的)の政略的
 政策がその東亞支配と経済的搾取とを永續せしめるが爲
 に、東亞の民族的自覺と東亞の親和統一の發展を種々な
 各種の自由方法を以て妨害したのであつて、かく政策の
 東亞民族の精神的犠牲には計るべからざるものがある。
 嘗て存在した東亞の親和性の感情は漸次消滅せしめ、東亞の文化的道義的精神に對する尊敬の念も薄らぐに至つた。
 と言はなければならぬ。政策は單に物質的のみならず精
 神的にも東亞を隷屬化しようとしたのである。
 併し下(東亞の)の精神的隷屬化に對し、東亞民族はそのま
 、黙從したのではなかつた。東亞の隷屬化に對する民族
 の解放運動はその自主獨立性の要求と共に漸次深まり、ま

(B 5)

た民族的運動として熾烈となつて来た。二の民族的解放
 或は民族的獨立の運動には歐洲の民族主義的思想の影響
 が、一と言へないであらう。併し東亞民族運動は抑壓
 者に對する反抗に止まらず、東亞民族の還人とするの
 精神的自覺が底流をなし、精神的隷屬化に對する文化民族
 の精神的保持が根柢に存したのである。そして、この自
 覺と解放の風潮に對し常に大きな刺戟を與へ來つたもの
 は實に我が日本であり、特に日露戦役がさうであつた。我
 が日本は近世初頭に歐洲の海外進出と相似て南方地域へ
 海外發展を行つたのであつた。江戸幕府に異つて鎖國政策

10x25

(B 5)

外の三左行
目録の洲
と米に訂

No. 15

が採らるゝに及んで遂に消滅し、幕末に米の強盛と共に
開國を餘儀なくせらるゝに至つた。この幕末期の國は
既に際して(我が)植民地化の危險に遭遇したのであるが、
國民の國家的自覺は植民地化の隙を興へず、明治維新を遂
行して迅速く近代の國家的統一を達成し、開國以來の後
進性の距離を縮めらるゝべく努力したるのである。(駕)の
成果が如實に示されたのが實に日露戦役であつた。最
たる島國日本が當時最強の陸軍國露西を撃破したとい
ふことは、驚歎すべき歴史的事件であり、その支那、印度を始
め東亞諸民族に與へた感奮には極めて大なるものがある。

(B 5)

10x25

内三六行目
指喉と咬
に訂正

No. 16

た。そしてその後には、日本の國家的發展は又東亞諸
民族に大きな刺戟と影響を興へ來つたのである。
日露戦争まで、東亞の勢力均衡の爲に示された英米の好
意は漸く薄らぎ、やがて敵意に満ちたものに轉ずると共に、
日本と他の東亞諸民族との間を離間しよとすむ政策が
採らるゝに至つた。特に支那に利権を有し又利権を擴大
しよとすむ米英が支那を指喉して日支間を計つたこと
は、やがて日支の紛争を生ずる根柢をなしたのであつて、支
那の民族主義運動(排日運動)となり、遂に滿洲事変より支
那事変に至り東亞の不幸な事態(實)を生じ、後者の策動が存

(H 5)

10x25

近代風の古き、北洲の自覚の域を脱すのことができな
 った。(詳細は、日下 蹴起の理由参照)
 併し乍ら大東亜戦争は東亜諸民族の東亜的自覚を勃然
 興起せしめ、或は之に拍車をかけ、對日憎悪や對日猜疑の感
 情を遙かに越えて、こゝに大東亜建設の共同意志の凝集を
 見出し至つたのである。緒戦に於ける東亜諸地域の裁定
 は今も東亜民族の政治的武力的勢力を一挙に壊滅せ
 しめ、こゝに東亜民族の解放意志は現實化の地盤を獲得し、
 奮然として大東亜建設の偉業に對する協力をなして出現
 したのである。これを誓へる會議の大東亜會議に外なら

(115)

せごらはなかつたのである。支那の一部人士の米依存
 思想は、日支の提携の上のみ成立す日東亜の解放、東亜の
 爲の東亜建設の大業を阻害し、支那事変の解決を不可能に
 する許りの支那事変にまで發展せしむるの根柢を
 なすに至つた。大東亜戦争は支那事変の當初より支那の
 背裏に存した敵性國家、即ち米英を二面の敵とすに至つ
 た影に外ならぬ。我々が日下は支那事変に際して、日下の
 求めぬルのが片々たる土地や權益の如きルのでなく、實に
 東亜建設への覚醒に存することを學び聲明したのである
 が、支那の民族主義的運動は遂に東亜の東亜的自覚に達せ

(115)

ないのであつて、この會議こそ東亞の歴史に一時期を劃す
 る世界史的事件であると言はなければならぬ。從來單に
 地理的名稱たりと出でなかつた東亞は、こゝに一個の共同
 精神を以て貫かれた歴史的世界へ躍進したのである。東
 亞は多より一へ、並存より統一へ、分散より結合へ発展した。
 大東亞はこゝに成立するのであつて、それは地理的東亞に
 冠せられた美稱なのである。大東亞は地理的觀念でな
 く歴史の概念、否、世界史的觀念である。大東亞の地域は大
 東亞の自體を有する民族の結集する所如何なる地域と
 否するものであつて、地理的東亞に限りせざるべきもので

「大東亞」
に發展したのである。換言すれば東亞は單なる地理的東亞より

(單なる)

(單なる)

はないのである。
 大東亞會議に於て各國の代表は日本に協力して大東亞
 戦争を完遂せんことを誓つた。大東亞戦争は東亞解放の
 獲得せしめ、大東亞建設の偉業なりと共に大東亞建設は勝
 利の暁に達成せしめるのである。若し日本にして敗戦を
 喫せんか、それは獨り日本の敗戦に止らず東亞全體の
 敗戦を招來するるのであり、米英の東亞に對する侵略と搾
 取は一層強化せしむるものと緩和せしむることなく、東亞民族の
 熱望する東亞の建設とは空に歸するであらう。大東亞戦

東亞の解放と大東亞の建設が成るか成らぬかは實に
大東亞戦争の勝敗如何に懸つて存する。

争は日本の自存自衛の戦争たるのみならず、實に大東亜の自存自衛の戦争なのである。それは獨り日本の総力戦たるのみならず、同時に大東亜の総力戦たるべきものである。大東亜の諸民族はこの一戦に敗れて永遠に米英に隷属するが、この一戦に勝つて解放を獲得するのみならず、運命を共にしてぬる。と共に、大東亜の諸民族はその東亜的自覺の具現たる大東亜建設すべき共同の使命を課せられたのである。大東亜戦争は、この歴史的使命と歴史的使命との上に立つ戦争であり、その自覺を信じて完遂せしむる戦争である。之れ大東亜會議に於て各国が日本への協力と大

(11 5)

10x 25

東亜戦争の完遂を誓った所以である。大東亜戦争の直接目標が米英に對する勝利にあるは言ふまでもない。併し大東亜戦争の勝利とは吾人の目的とするものの貫徹即ち大東亜の建設或は東亜共榮圏の確立に存する。之が大東亜戦争の究極目的をなすのである。この場合、吾人は大東亜戦争に於て戦争と建設とが、即ち米英の東亜支配の破壊と大東亜の積極的建設とが、表裏一體をなして不可分のものであることを注意しななければならぬ。米英の東亜支配の覆滅即ち東亜の解放なくして大東亜の建設はあり得ず。併し單なる覆滅や解放のみでは

(11 5)

10x 25

一頁左三行目
所を以て
訂正する

争と根本的に異なり所以に存する。戦後経営なるものを
宣傳しなればならぬ米英に於ては、戦争と戦後とが二元
的に分裂してゐる。このことは彼等の戦争が畢竟何等の
世界支配の確保永續以外の何れのもなく、従つて戦争せ
ぬの何が何等積極的な建設的創造的意義を有しないこ
とに基く。米英の戦争目的なるものが「自由と言ひ安全と
言ひ従来使ひ古された舊觀念を一步も抜け出す、今次大戦
の存する歴史の意義を表現すべし」^(何等の)権を有せず、その戦後
経営なるものは米英支配の旧世界秩序の永續強化を用
指す以外に何等新秩序のものと見ないのは、このことを證し

(115)

10x25

No. 23

未だ何れのもでない。それは大東亜の建設即ち東亜共榮
圏の建設に至つて、始めて覆滅の意義をなし、解放の意義を
満すのである。されば大東亜戦争に於ては戦争中に建設
があり、建設が戦争でなければならぬ。戦争が終つて建設
が着手せられ、建設には戦争の終場を俟つと云ふ如きこと
は、大東亜戦争の本義をなすものではなからぬ。大東亜戦争に
は所謂戦後乃至戦後経営が存しない。戦後乃至戦後経営
なるものは戦争そのものと共に進行はするのである。こ
に大東亜戦争がその本来的性格に於て建設戦であり、兼
り道義の聖戦たる所以がある。せいてこの點に米英の戦

(115)

10x25

このことは日本の對米英武力戦が戦時資源の先取獲得を目標とすると共に之を俟つて對米英武力戦の持続せらるる事情と適應する。

東亜の版の東亜なるべき新秩序に立つ

No. 26

大東亞戦争の爲に東亞諸國が日々に協力すると共に、この
 協力が大東亞建設の共同目的に對する責任分擔の精神に
 出で、この責任分擔の精神が強烈なり道義の精神に基くこ
 と、二、に大東亞の建設が米英の所謂戦後經營とは異なり持
 質が存するのであり、この道義が東洋の道義たることを示
 す所以が存する。そしてこのことか、^又や、大東亞の秩序
 が東亞の諸國諸民族の共存共榮の秩序であり、大東亞が東
 亞「共榮圈」に外ならず、~~この外に外ならず~~、このこと
 である。東亞民族の死生存亡の戦と同甘共苦の生活の基礎が
 一築き上げられる大東亞は、単なる利益の結合や権力的歴

(115)

10x25

No. 25

大東亞戦争に於ては戦争即建設であり建設即戦争であ
 る。それは武力的、経済的、政治的に然るのみでなく、思想的
 精神的にも然るべきもの、即ち物心双方に亘るのである。
 併し、この建設的創造的戦争は長期に亘り困難を伴ふこ
 のであり、従つて不撓不屈の意志と忍苦の精神を^(要する)貫徹すべ
 き^(て)である。と共に、この意志と精神を貫くものが大東亞建
 設の歴史的使命感と大東亞建設の^(道義的)責任感とに外ならず、
 大東亞戦争は東亞諸民族の同生共死の戦争であり、従つて
 その爲には同甘共苦の道義的態度が要請せられる。大東

(115)

10x25

No. 28

あり従って之には一國の他國支配の如きを前提せざら
 東亞共同宣言は大東亞諸國の共同意志を宣言せしむるの
 取扱ふのを宣言せしむるに過ぎないのである。然るに大
 は米英西國が彼等の世界支配の前提の下に世界を如何に
 諸國の共同意志を表現せしむるのではなからず、否、大西
 洋憲章はロースホルトとチャーチルを署名者とする米英二
 國の共同宣言に過ぎず、彼等の傘下に糾合せしめられぬ
 雲泥の相違が存在することは何人も氣づくであらう。大西
 洋憲章はロースホルトとチャーチルを署名者とする米英二
 國の共同宣言に過ぎず、彼等の傘下に糾合せしめられぬ
 諸國の共同意志を表現せしむるのではなからず、否、大西
 は米英西國が彼等の世界支配の前提の下に世界を如何に
 取扱ふのを宣言せしむるに過ぎないのである。然るに大
 東亞共同宣言は大東亞諸國の共同意志を宣言せしむるの
 あり従って之には一國の他國支配の如きを前提せざら

(11.5)

10x25

No. 27

である。大東亞共同宣言は責にのみ、運命感と使命感よ
 り逆り出て、東洋の道義に基く東亞永遠の平和を宣言せし
 結ばれたる團結であり、深き相互信頼に基く道義的共同體
 同に對する認識と歴史的使命の共同に對する感情とより
 的^性精神の紐帶は存しない。大東亞は漸く歴史的使命の共
 何等共通の歴史的使命もなければ共同の歴史的使命もな
 の本質を全く異にしてゐる所以である。敵方の陣營には
 従つて欣然同生共死を誓ふ同甘共苦を味ふべき道義
 服を以て構成せしめた國際團結とは類を異にする。大東
 亞が米英とその傘下に糾合せしめられた敵方の陣營とそ
 何等共通の歴史的使命もなければ共同の歴史的使命もな
 の本質を全く異にしてゐる所以である。敵方の陣營には
 従つて欣然同生共死を誓ふ同甘共苦を味ふべき道義

(11.5)

10x25

の意味で大東亜共同宣言は大東亜民族の憲章たりし盡さ
 哲学と世界観に立脚してゐると言はなければならぬ。こ
 に於て大西洋憲章とは思想の性格に於て全く異り、別個の
 に基き東洋道義の精神を基礎とするものである。この點
 ければならぬ。勿論この新秩序思想は東亜の東亜的自覚
 大東亜共同宣言こそ新秩序思想を告知する憲章と言はな
 ければならぬ。勿論この新秩序思想は東亜の東亜的自覚
 に基き東洋道義の精神を基礎とするものである。この點
 に於て大西洋憲章とは思想の性格に於て全く異り、別個の
 哲学と世界観に立脚してゐると言はなければならぬ。こ
 の意味で大東亜共同宣言は大東亜民族の憲章たりし盡さ

(115)

10x25

秩序を誓へる大東亜宣言こそ真意の意味に於て自由平等を
 根柢より否認し、相互の自主獨立を尊重する共存共榮の秩
 序を誓へる大東亜宣言こそ真意の意味に於て自由平等を
 此獨立で平等であり得ぬことは勿論であり、凡そ自由
 獨立平等の名に値せざればないのである。支配隷属の關係を
 根柢より否認し、相互の自主獨立を尊重する共存共榮の秩
 序を誓へる大東亜宣言こそ真意の意味に於て自由平等を
 此獨立で平等であり得ぬことは勿論であり、凡そ自由
 獨立平等の名に値せざればないのである。支配隷属の關係を
 根柢より否認し、相互の自主獨立を尊重する共存共榮の秩
 序を誓へる大東亜宣言こそ真意の意味に於て自由平等を

(115)

10x25

大東亜の道義的精神を表現せしむる意を
 を以て、ふしく「大東亜憲章」と稱するに
 東亞諸民族が東亞の解放の熱意に燃え、大東亜建設の爲
 に總力を結集し、日本に協力して大東亜戦争の定遂に邁進
 して、この下に對し、獨り重慶政権が米英の支援の下に、日
 の闘争を續けつゝ、あることは、寔に遺憾極りなきところ
 ある。我が國が日支の提携をこそ欲すれ、日支の闘争を欲
 せざるは言を要せざる所であつて、大東亜細亞の建設を志す
 支那民衆の士に既に知る所、支那事变當初に我が政府が不
 擴大方針を表明し、或は支那民衆が敵に非ざることを
 表明

(115)

10x25

或は事変の解決が東亞新秩序の建設に存することを宣
 言し、以て反者を促したの之に基くのであつた。幸ひ汪
 兆銘氏我れに呼應して新國民政府を樹立し、こゝに和平の
 端緒が開かれ、至つたが、支那は和平と抗日との二陣營
 に岐れた儘大東亜戦争に直面するに至つた。大東亜戦争
 は、故戦支那の背後に隠れて東亞の和平を妨害する米英と
 の戦争であり、支那事变の當初より存せし眞實の敵をのて
 あつた。それは、單に日本の敵たるのみでなく、實に東亞の
 敵である。支那事变が大東亜戦争に發展するにつれ、背後
 の敵が表面の敵となると共に、支那事变は其の性格を轉じ

(115)

10x25

No. 39

てあり建設即解放である。解放なくして建設はないが、建設なき解放は無意味である。解放と建設とは一如を日所に大東亜戦争の根本義があり、大東亜戦争が獨り日本の戦争ばかりのみならず、同時に大東亜全體の戦争なり。所以かある。そして又この點に大東亜戦争の米英に對して存する意義と曰ふ及び東亞諸國に對して存する意義との根本的相違が存するのである。戦火の中に於ける大東亜の建設は、この建設を妨害し、大東亜を破壊し、大東亜を舊き東亞に還元せんとする米英に對して戦を抜き、以て大東亜を防衛するにこそよつてのみ達成せらる。このことは戦争の現

(11 5)

10x25

No. 34

て大東亜内部の内乱の性格を帯び来たつたのである。敵に對するときは内乱が止むべきは當然の理に属する。然るに大東亜戦争進展し、大東亜會議開催せられ、租界の還付、治外法権の撤廢既に行はれ、重慶政府の抗戦理由全く失はれ、これに拘らず、なほ抗戦を繼續するは、大東亜の理想より見て極めて遺憾な事柄と言はなければならぬ。かくては、蔣介石領導下の重慶政府は永遠に大東亜の命運を決定したる諸力を免れ得なくなるのである。中国の命運が、かく重慶の慶支那の熱望する所も中国の自主獨立性の獲得にあり、その敵は畢竟するに米英を出でない苦である。中国の命運

(11 5)

10x25

段階に於ける大東亜諸國の責任を規定し來りてありう。
 之れは大東亜戦争の直接擔當者たる日本に協力し、その戦
 力を増強し、以て大東亜戦争を勝利に導くことである。日
 本の勝利なくして大東亜の建設は遂に不可能である。若
 し日本にして敗れんば、大東亜諸民族は数億の手に亘つて
 一層苛酷なる米英の隷屬に甘んぜなければならぬであら
 う。

併し大東亜戦争の究極の勝利とは何であらうか。それは
 大東亜の建設に外ならぬのである。米英に對する勝利
 は大東亜の建設成り、大東亜を爲す東亜に引戻さんとす

(135)

10x25

日本は國家の
 存亡を賭して東
 亞解放の聖戰
 を戦ひつゝあ
 る。これ以上高
 く大なる協力
 が存するであ
 らうか。

米英の野望が挫け彼等も大東亜を承認せざるを得なくなる
 ことに外ならぬ。之れは日本の勝利たることを共に東亜の勝
 利である。この勝利は勿論日本の力によるが、それは同時
 に大東亜諸國の協力に俟たなければならぬ。併し翻つて
 考へて見れば、日本による大東亜戦争の遂行は、大東
 亜諸國に對する最大の協力である。→大東亜は即ち日本と他の大
 東亜諸國との相互協力換言すれば大東亜諸國全體の相互
 協力を以て成立つものに外ならぬ。大東亜は相互協力
 體である。こゝに戦時戦後を問はず、大東亜が大東亜の地
 想に生きる諸國の相互協力を基幹精神とする所以が存す

(135)

10x25

No. 43

不い所であらば、大東亜将来の歴史にこの二時期が劃され
 りであらうことは疑い得ない。そしてこの二時期に於て
 大東亜の秩序が必ずしも同じでなく、前者は戦時秩序たる
 特質を存し、後者が平時秩序たる特質を存すことと否定
 できない所である。このことは前者の段階に存する今日、
 大東亜諸民族が如何に行動すべきかを規定し來るのであ
 った、兩者を徒らに混同することは漁童に遊けしめればよ
 りぬ所である。
 併し乍ら吾人から今日この区別以上に更に深く留意すべ
 き事柄は、この二時期がその主要特色を以て区別せらるるべ

(115)

10x25

No. 42

ののである。
 大東亜戦争開始後の大東亜の歴史を考ふるに、吾人は二
 つの時期を区別して考へ得るのである。一つは大東亜建
 設の過程である。もう一つは大東亜の建設既に成れる時期
 である。前者は解放即建設の戦時であり、後者は建設のウ
 成せる平時である。前者の時期には敵の妨害を存し、後者の
 時期には敵の妨害が存しない。前者は即ち大東亜を建設
 しつつある時期であり、後者は大東亜の安定を維持し、大東
 亜の発展を行ふ時期である。ゆゑ、この二つの時期を劃す
 べき事は、いづれも吾人の遠かに豫断し得べき事柄ではな

(115)

10x25

古人が生死を七
 不踏と華英と我
 力の根柢は、
 (主作)の一言、
 運送の道義の精
 神であらうと云に
 吾人が永遠の理
 想として莫れす
 るものも實にこ
 の精神の本體の
 一表現とせられた
 相に非ざらざら
 である。

No. 46

それ敢て概はざる態度が元々東洋解放の原動力なのである。かくて吾人は大東亜建設の過程期と建設期とを大東亜の安定と発展を計り時期とを区別しつゝ、初は他面にて西時期を一貫運送する大東亜本然の道義的精神の存続を事實として認識しなげればならぬ。大東亜本然の道義的精神が吾國の實現せられた相は、大東亜諸國諸民族の共存共榮であり、かくて大東亜は共榮圏となる。併し共存共榮は如何にして達成せられ、如何なる根柢より成立し來るのであるか。之して又共存共榮の秩序は米英の秩序と如何なる點で異なりであるか。

(B 5)

10x25

No. 47

凡そ共存が成立つ爲には先づ第一に地理的條件として近隣性が存しなげばならぬ。これは何人にも明瞭である。俗に遠き親類より近き他人と言はるゝ如く、相互に接近して交が繁きことは共存を成立たしめる最も基本的な條件である。このことは人間に於ても民族に於ても変わり所なく、近隣に存するものと天災地変は勿論風土自然の恩恵も亦均しく享けるのである。こゝに自然的運命共同性の感情が相互を貫き所謂共生(Symbiose)の觀念が成立するのである。勿論交通機關の發達に伴ひ、近隣性の觀念には時代により變化の生ずるは更に難く、文明の急速度の發達は

(B 5)

10x25

念は存しなかつたのである。このことは歐洲近代の所謂
 人格觀念が法的な權利義務の主體として考へられ、親子男
 女同胞の如き人倫の秩序から離れて構想せられたのと照
 應する。故に歐洲近代の秩序思想は地域性（或は存圏）の觀念を巨視
 し躍躍する如き方向に發展したのであつて、その典型例を
 例が實に大英帝國に外ならぬ。七つの海を支配し、日没
 するを知らぬと誇稱する英帝國の構成は、何等の意味でも
 共存圏と評し得るものではなく、完全に地域性の原理を無
 視したものである。今日、英帝國の存在そのものが世界平
 和の障礙たる所以は一つはこゝにある。勿論秩序思想は

(R 5)

10x25

自然條件であると言はなければならぬ。
 それ故に共存圏を成立する為には一般に地域的近隣性が
 必要であり、民族的人種的親近性が必要である。このこと
 は人類平和を實現すべき世界秩序の構成に極めて重要な
 意味を有する事柄であつて、人類生存に極めて自然な基礎
 たるべき共存圏の自然秩序を徒らに無視することは、人類
 平和の實現とこの存続に甚だ有害な作用を及ぼすのであ
 る。然るに翻つて近代（歐洲）の秩序原理を顧みれば、世界秩序の思
 想の下に果して必、地域性の觀念、共存圏の觀念が存し
 たであらうか。否、歐洲近代の秩序思想には凡そかゝる觀

(R 5)

10x25

體に於てモンニソンの風土をなし、数多の民族が存すとすは
 思ふに、主として半島に於ても、居住の生活形式に於ても、相通するものがある。
 (一) 黄色人種を住民とし、その間親近性が存するのである。
 大東亜白帯の疎隔や對立が、欧米の侵略以來の現象であ
 る。こゝには既に論じた如くであつて、その原因は民族的人
 種的異因と全く無関係のものに過ぎない。更細更が一
 つなりと言はれ、大東亜主義が成立し得る自然的基盤は
 二、にある。勿論、過去の古き東亜には密接な交通交易が
 存在す。實上濃厚な親近性は存しなかつたと言へよう。
 近代の交通や交易を経て既に密接な関係を有するに至つた。
 併し今日はこの親近性の感情が極めて強度に昂揚せられ
 つ、ありのであつて、他の諸條件と結びつき運命一體の共

(B 5)

10x25

ぬ。世界の廣域秩序思想は二、に成立するものである。
 大東亜は一個の共存圏をなすものである。大東亜は大
 東亜は一個の共存圏をなすものである。大東亜は大東亜は一個の共存圏をなすものである。
 東の秩序思想が極めて不自然な根據に立つ謬想たり。こ
 を立證する事柄に外ならないのであつて、その秩序思想は
 實は秩序の思想と言ふべきでなく、率う無秩序の思想たり
 に過ぎないのである。地域性(的)を無視し共存圏を顧みぬこ
 とは世界秩序の特質をなす。新秩序は之に對して地域
 的親近性を重視し、共存圏を基底とするのでなすべから
 ぬ。世界の廣域秩序思想は二、に成立するものである。
 大東亜は一個の共存圏をなすものである。大東亜は大東亜は一個の共存圏をなすものである。

(B 5)

10x25

のである。そして、日風土の特質に應ずる基干的文化
 の共同性、特に生活意識、團體意識、倫理意識等の文化的精神
 の共同性は、共存を可能ならしめる極めて重要な要素であ
 る。この共同性(基干的)が存続し、文化様式の親縁性が存するから
 ば、高級なる歴史的文化の末端に相違が存する(これは)何等共存
 を阻害する力となるのではな。この相違の存在は
 却って文化の交流と発展を促す利戟となるのである。
 大東亜はエンスロン地域として農耕を主生業とする基干
 文化が成立し、大東亜民族の主流は共同の文化的精神が存
 続し来た。それは自然の恩恵に感謝して自然との融合

(115)

10x25

生感の存在一つ、ありるのである。大東亜は先づ(その)意旨に於
 て共存圏たる自然性(的)を共に、日地域の孕理と母胎秩序
 の根幹とする思想を背景とするのである。
 共存が成立する為の第二の条件としては文化の共通性
 乃至親縁性は共存圏成立の必須条件である。文化と言は
 れるものは(衣食住の如き)日常生活より(社会の制度、
 藝術)等までも含むもので極めて廣き範囲に亘り、現存の
 文化は既に交流や移植の長き過程を経て成立した歴史的
 文化であり、文化は元來々の地域の風土的特色に呼應す
 るものとして、前述の地理的条件と密接な関係を有する。

(115)

10x25

No. 56

を目標とする自然意識であり、祖先を崇め、貞節を愛育し、長く
 大なる生命に生き、團體主義的意識である。かゝる意識
 の上に諸種の文化が形成せられ、と共に商業や工業の文
 化形式の根柢に於ては、これに規定せられたのである。こ
 れに東亞文化の共同性乃至親縁性が所による相違をこへ
 て存し、東洋共通の精神を成したのであつた。
 文化意識乃至文化的精神の共通性ゆゑに共存の成
 立が困難なことは明白な事實であつて、かゝる共通性の存
 在は諸民族間の親近感情を益々強化し、こゝに共存圏の成
 立を極めて自然な現象たらしめて來る。所謂文化圏はこ

(115)

No. 57

、から發生する。共存圏と文化圏とは根本に於て一致す
 るのが自然である。この事情は又世界秩序の構成に重要
 な意味を有し、正しき世界秩序は共存圏を重要視すると同
 様に基干文化の文化圏を重視し、これを基盤として構成せ
 られるのが當然である。然るに近代の世界秩序の相入には、
 地域性の觀念が全く無視せられたのと結ぶつて、かゝる
 文化圏の觀念は少しも存しなかつたのである。近代歐洲
 文化は他の個所で詳しく論じた如く、
 政治と經濟上に於ける
 高の文化乃至最も發達せり文化とす。歐洲中心主義の觀
 念が存し、世界制覇の野望と並に、華々たる思想的に是認す

(115)

10x25

10x25

抑：学生は東亞と根を精神を
 根を精神を
 文化は根深く
 浮遊する如き
 ことなく、其の流
 入は極めて速面
 のものに止まり

No. 58

の帝國主義的(1)文化理論として展開せられた(2)世界恒久(3)平和
 の原理(4)等照(5)。確かに歐洲諸國の東亞進出、欧米の東亞隷屬
 以來、東亞には欧米近代文明が滔々として流入した。併し
 東亞の基元文化の精神は依然として存續し來つた。大東
 亞の自覺が發生する主體の根柢は實にこの精神に外なし
 ない。勿論、東亞が欧米の支配を受けりに至るにはそれ相
 應の根柢が存し、特に東亞文化の中に於ける一根據が存す
 る。この點に對する東亞民族の自覺は解放運動と共に進
 む。近代技術や近代科學の攝取は漸次旺盛となつた。併し
 このことは東亞文化精神の弱体化を意味するものでな
 い。

この文化思想の下に、東亞の地位の確立が、確立せられたるは蓋し當然である。

(11 5)

10x25

No. 59

く、東亞文化精神が世界史の新段階に於て新形態の文
 化を形成し、よきとすの動きを弄するの以外なきなり。そ
 してこの動きは又大東亞現在の共同な文化史的趨勢をな
 しつゝ、ありのてある。
 共存が成立する爲の第三の條件としては、経済的條件が
 必要である。地域的に近接し文化的に親縁性を有する共
 存國が、其れ自身に於て一應自足性を保ち得る如き経済的
 能力を有し、國內國家の間に有無相通する相補性が成立す
 るとき、共存國は各責任に共存國となり得るであらう。勿
 論、経済は常に發展し得る動的の力であり、其の條件は各

(11 5)

10x25

今、現代文化の水
準に應ずる経済
的條件を考ふに
大東亞は東
亞諸國の相互
通ずる相補性
を以て一應自
足性を保ち得る
一個の経済圏を
なす理想の條
件を備へてあり
とある。

No. 60

時代の文化生活に相對的のりのである。現代の経済的條
件は現代世界の生活水準に對應する條件なりと言ふ未
でいふ。さて獨立國家は凡て経済的自主性を要求し能
し限り自給自足を得ようとするのである。蓋し経済的
自主性を有する國家は未だ眞の獨立性を有するるのでなく、自
給自足が何等の程度で存在せぬ國家の獨立は全く形式上
の各目に過ぎないからである。之れ國家の自主獨立性が
必ず經濟上も自主獨立を要求し來つた所以であり、この二
とは極めて密接な事柄であると言はなければならぬ。併
し經濟的自主性と自給自足性とは同じではない。自主性
(115)

10x25

と共に、近代の國
際貿易、世界經
済は益々國を交
る自給自足を不
可能ならめつた
たのであつて、世
界經濟の存在は
益々難しくな
るもの多しと考へ
しつて行くべき
である。

No. 61

國際的
は世界經濟機構に於ける政治的のりであるが、自給自足
は本来的に經濟的のりであつて、それは國土の埋藏する
性は自然資源に制約をうけるのである。そして如何に
も國家は現代に於て完全なる自給自足をなし得るものは
なく、二、に國際貿易が成立し、世界經濟が形成せられ
る。然るにこの世界經濟に於て自主性(經濟的)と非自主性(政治的)の差が存し
あり、又現代世界經濟の内部には其の顯著なき差が存したのである。
近代の世界經濟は自由主義の原則に立脚し、自由通商の
經濟として出発し、世界の全體が有無相通することの義務(自由)を
せられた。然るに自由主義の原則の展開せらるる所、優勝
劣敗の經濟の秩序は遂に米英の獨占的支配に歸着するに
(115)

10x25

べき理想をなしてゐる。それは近代世界が之を無視蹂躪し、
 歐洲を同時にせめてに擴大し、歐洲外を凡て欧米に從属せ
 るる如き秩序を構成し、米英は能くまでこの秩序を維持せ
 ると欲するのりである。それ故、世号の歴史の段階に於てか
 らの共榮國を建設せんが爲には、更に歴史的条件が備はれ
 なければならぬ。これは歴史的条件とは何であるか。それ
 は既に予論及せし如く運命の共同性と歴史的使命の連
 帯性に外ならぬ。
 東亞の諸民族は程度之差こそあれ、欧米の支配下に立つ
 とし、共同の運命を忍び受へ來つた。大東亞戦争は米英の
 政治経済上、
 此の自主獨立を毀損せしむ。

10x25

東亞支配性を覆滅し、東亞諸民族を親屬の地位より解放せ
 ることである。大東亞民族は大東亞建設といふ歴史的使命に
 對し運帯性を有するものである。この歴史的使命の共同性
 と歴史的使命の連帯性とが共榮國建設の動力をなす。この
 である。そしてこの運命共同性と運命連帯性とを密接不
 可離の關係に置く。このとして、吾人は現代戦の特質を擧げ
 なければならぬ。航空機の高速な飛達、戦争の相貌を一
 変したのみならず、實に國防の觀念に變革を齎す人は止
 まざる勢にある。今日に於ては從來の如く一國の國境線
 に於て國土を防衛することは不可能となり、國防線は隣接
 して、自主的の大東亞を建設

10x25

No. 69

つて之に應ずる莫大不衛生産と補給とを必要とするに至つた。而して總力戦は過去の戦争に比すれば必ず長期戦の性格を帯びるのである。歐洲の大戦は既に満五年を越え(昭和十四年九月)大東亞戦争も既に満三年を越し(昭和十六年十二月)支那事変を通算すれば實に八年半の歳月に及ばんとす(昭和十二年七月)。故に現代戦に於ては戦争遂行に兵糧の戰略資源を確保すること絶対必要とあり。國防空間は之を包含する所にまで擴大せられて來る。而してこの國防空間内部の諸國は實質上の中立を維持し得ず。交戦國と盛衰甘苦の運命を一體にすむ關係に置かれて

(11.5)

10x25

No. 68

國を越えた邊の彼方に設定せられ。國防空間は急激に膨張せざるを得なくならに至つた。やしてこの國防空間内部の諸國は最早や嘗て見られた完全中立の如き状態は欲し得ず。得ず。假令國際法上の中立を維持し得たとしても、經濟上實質上も嘗て見られた如き中立國の繁榮は維持し得ず。畢竟隣接交戦國との運命を共にせざるを得ない。得ず。である。現代戦が殆ど中立國の存在を許さぬ世界戦となつた。このは之に基く。と共に世界戦は益々中立國の存在を許さなくならるのである。更に現代戦は總力戦となり。過去の戦争を以ては殆ど想像し得ない程の莫大不消耗を伴ひ。從

(11.5)

10x25

わりのである。

かく現代戦の特質より来る中立の不可能、盛衰甘苦の一

體といふ事情は、米東亞の歴史的使命の共同性と歴史的使命の連帯性を暗示し、二、に大東亞建設を必然的且つ現實的のしるためのである。世界の真の秩序は、

、の共存の廣域圏を基盤として構成せられるのが自然且つ當然である。この廣域圏は、米東亞の廣域圏即ち米東亞の理想とする。

すの秩序なのである。併し吾人は二、に共存共榮圏が決して「封鎖性」を有するものではないことを改めて注意しな

ければならぬ。封鎖的なる共存共榮圏が成立するべき二

（他に對して）
（孤立的）

（米東亞の歴史的使命の共同性と歴史的使命の連帯性を暗示し、二、に大東亞建設を必然的且つ現實的のしるためである。世界の真の秩序は、

、の共存の廣域圏を基盤として構成せられるのが自然且つ當然である。この廣域圏は、米東亞の廣域圏即ち米東亞の理想とする。

すの秩序なのである。併し吾人は二、に共存共榮圏が決して「封鎖性」を有するものではないことを改めて注意しな

ければならぬ。封鎖的なる共存共榮圏が成立するべき二

（他に對して）
（孤立的）

10x25

これは決して人類の理想ではない。のみならず、圈内に共存共榮が成立しても、圏外に共存共榮が成立せぬことは、凡そ共存共榮の精神に反することであり、萬邦相倚り相扶けて共榮の樂みを偕にする世界平和の理想に背くのである。

共存共榮圏は、他に對し世界に對して「開放的」のものでなければならぬ。そして、経済上も文明上も「封鎖的」なものと欲

いこれ得らぬものである。併し、
（無秩序の）
から共存共榮圏の確立を容れず、國家が直接に世界に連結する開放性は、決して萬

邦の共存共榮を齎すものでなく、世界の平和を招来すもの

のではある。歐洲近代の世界秩序理念は、國家が直接に世

（既に論述し指摘した如く）

10x25

之ヲ為邦と學を招きし世の平和を實現すの唯一の道と云ふのである。

同時ニ封鎖性^とと開放性^とを準備する。

これは封鎖社會と開放社會、Gemeinschaft と Gesellschaft (Community Association) と云ふ如く社會學的範疇の何れにも攝し得ず、寧ろ或る意味で之の綜合統一と云ふべき新に別個の範疇をなすものなるべし。

稀薄な國際世界の近世史を經る今や現代史は新に共存共榮國を復活建設し、國家の之を媒介として世界に連結し、其の之によつて克竟せしむる段階に達したのである。

吾人は共存の成立すべし諸種の條件を求めて地理的、文

(115)

化的、經濟的の條件を擧げ之によつて共存が共榮に高まることを示すと共に、大東亞共榮國が更に歴史的條件を建設の動力とすることを論じた。併し共存共榮が更に成立すの爲には更に此の條件を具備しなげばならずぬ。

此の條件とは何であるか。之が意に道義的精神に外ならずぬ。

共存は個々の生存の集積では無い。生存の集積は依然として生存の集積たるを脱せず、共存といふ別個のものに達する譯には行かぬ。それは一を幾く集めても一の集

合であり、二、三、四、五、六……といふ別個の数とはならずぬと事

(115)

10x25

情を等しくする。この理は人間に於ては國家民族間に於ては毫も變り所がない。國々の生存の秩序なき集合を以ては萬邦の共存には達しない。否萬邦が夫々自國の生存のみを目的とするときは生存競争が生じ、共存どころか強食弱肉、支配隷屬が^(招来せられ)歸結せらるゝのである。この意味で單なる生存の主張は共存の否定であり、個々の生存の主張は共存の破壊である。萬邦の共存が成立つ爲には萬邦が相倚り相扶くる一定の秩序がなければならず、萬邦の共存を成立たしめるにははか、の秩序を建設する精神がなければならぬ。萬邦が相倚り相扶けることは萬邦が夫々その所を得

(18.5)

10x25

つときは又生存が惡に成立つ。生存は^(一度)生存を否定する立
存は道義的精神によつてのみ成立つ。そして共存が成立
が道義或は道義的精神と言はるゝものに外ならない。共
ときは共存が成立する。かゝる生存欲を否定超越する働き
であり、自國のみの生存を企圖する生存欲を否定放擲する
の次元は個々の生存といふ次元を^(棄却)超越する一段高き次元
破壊を齎し、生存と共存とは相背く面を有するが故に、共存
である筈である。然らば個々の生存の主張は共存の否定
の。従つて共存の秩序を建設する精神は^(互に)此と與へる精神
の。ここに上つて成立つ。即ち此を得るの秩序に外ならない
破壊を齎し、生存と共存とは相背く面を有するが故に、共存
である筈である。然らば個々の生存の主張は共存の否定
の。従つて共存の秩序を建設する精神は^(互に)此と與へる精神
の。ここに上つて成立つ。即ち此を得るの秩序に外ならない

10x25

場を過つて得るかのであつて、単に自己の生存を求めるときは却つて生存を得ず、自他の共存を求めるときのみ眞に自己の生存を得るのである。之が自他共に所を得、自他互に所を興へる道義の實現態に外ならずや。

右に述べたのと全く同様のことから共榮に就いても見られるのである。共榮は決して「繁榮」の集積ではなく、「繁榮」の立場で達せらるるものではない。萬邦が互に自國の繁榮を追求するときは必ずや他を倒さずへは止まざる繁榮を現し、その結果は必ず他の犠牲に於て榮えざる不均等の状態、即ち繁榮と貧困の對立態を現せざるを得ないのである。

(115)

10x25

かくて近代世界に於ては米英が我が世とせ思ふ繁榮を極め、重細魚の諸民族の如きは貧窮のとへ底に墮いたるのである。萬邦の共榮を實現するには自國の繁榮を計り利己的欲求を否定する道義的精神に立脚しなけれはならぬ。繁榮欲を否定し享樂を放棄する精神は繁榮的精神である。

繁榮は道義を道義として實現する基在特質である。共榮に達するには先づ繁榮の態度が必要である。併し道義の立場は徒らに欲求を殺すのではない。欲望の繁榮より解放せられ、^{欲望の滅えを超越する}自自由なる精神、^{即ち}自主性と自在性をもつ精神である。かく、この精神にして始めて欲望に止まらぬ。

10x25

(115)

つて、この精神ニシテ大東亜精神と言はるべきものである。又古来東洋の道義と稱せられて来た精神に外ならず。この精神の政治、文化、経済に發揚せしむる所、此に大東亜共同宣言が表明す。獨立、親和、文化、昂揚、經濟繁榮の諸原則となり、更に一轉して世界平和に實現せしむる所、世界進運貢獻の原則となるのである。

(115)

10x25

べき所を與へ、欲望を眞實に生かし得る。欲望は即ち欲望を否定^(起)克する。望欲の精神によつて淨化せしむると共に、正しく欲望として復活するのである。共榮は正しくこの共榮を得る始りである。眞實の繁榮は繁榮を否定する道義を標榜せしむる限り永遠に達し難い。に成立つものに外ならず。繁榮を遂する者却つて繁榮を失ふ。共榮を冀する者直に繁榮を得る。此天の道である。吾人は繁榮と共榮との關係を無條件に考へず、右の如き關係に存する。ことを深く覺^(る所)なきはならず。大東亜は右に述べた如き共存共榮の精神に基いて建設せられ又運營せられるのである。大東亜は即ち強烈な繁榮の態度を眞底に潜め、道義の精神を基本とするのである。

(115)

10x25